

“フィールドに出られないフィールドワーク” という経験

——惑星社会の諸問題に応答する “うごきの比較学” (2) ——

新 原 道 信*

Experience of “Fieldwork that Cannot Appear in the Field”: “Comparatology of Nascent Moments/Processes” Responding for/to the Multiple Problems in the Planetary Society (2)

NIIHARA Michinobu

How do we create the “wisdom of coexistence (*saggezza di convivenza*)” that are responding for/to the multiple problems on the planet Earth? How do we create the “wisdom” that allows us to experience the planet Earth as one composite “sea” and society as “islands” floating in it?

How we are perceiving/ sensing/ becoming aware and responding/sympathizing/ resonating to the to the “screams of dissonance (*le grida disfoniche*)” of the Earth, of other creatures, of other human beings, simultaneously and continuously, breaking the apparent “harmony” and “stability”? How is it possible to “Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place”?

Can the Exploring Fieldwork in the Planetary Society take on or respond for/to this challenge? What are the conditions for that? What conditions are needed for Fieldwork to grasp the planetary society?

But now we are facing a “Coronavirus Disease 2019”. It is necessary to rethink the Planetary Society that enabled Fieldwork toward the “end/edge (*finis mundi*) of the Earth” and the way of being researchers there.

What can we do the Exploring Fieldwork in the Planetary Society when we can't get out in the field? What can we do to comprehend the nascent moments/processes of humans and society through the experience of “Fieldwork that cannot appear in the field”?

This article evolved from a research project called “Sociological Explorations on the Comparatology of nascent moments/processes responding for/to the multiple problems in the planetary society” which is a part of the European Research Network's activities at the Institute of Social Sciences, Chuo University. The project is based on the idea

* 中央大学文学部教授

that exploring, against the tide of the disposition to dissociate/disengage oneself from what is happening, “Co-creating the Communities and Co-becoming communally for the Sustainable Ways of Being” is urgent and crucial for the 21st century planetary society, in which the multiple problems concerning exclusion and inclusion are increasingly frequent. Throughout the project, we are walking unsymmetrically, contrapuntally and poly/dis-phonically on the planet Earth and on perceiving and responding for/to the multiple problems of the planetary society. The article reflects on the <epistemology / methodology / methods / data> developed from dialogue with Alberto Melucci, Alberto Merler, Andrea Vargiu, Anna Fabbrini-Melucci.

キーワード：惑星社会，惑星地球，内なる惑星，カタストロフ，フィールドワーク，フィールド
ノーツ，うごき，比較学，新型コロナウイルス感染症（COVID-19），小松左京，メ
ルッチ，メルレル

【目次】

- 1 はじめに——学術的な問いと本稿の位置
- 2 “フィールドに出られない”という状況での同時代認識——ウイルスと人間，社会現象としての「ウイルス」 2020.04.12
- 3 “フィールドに出られない”ときのフィールドワーク——「新型コロナウイルス感染症」が拡大する社会を生きるために 2020.04.17
- 4 “フィールドに出られないフィールドワーク”による視野の深化と展開——「微生物の目／生物の目／生態系の目」
- 5 「地球論的還元」と「地球に住む」——〈微生物の目（microbiological/clinical）／生物の目（biological/global）／生態系の目（ecological/visionary）／惑星の目（planetary）〉という〈エピステモロジー〉
- 6 おわりに——「新型コロナウイルス感染症」のもとでの“フィールドに出られない惑星社会のフィールドワーク”の経験から組み直された“うごきの比較学”の〈メソドロジー〉

日常生活における数々の体験は，個人の生活の単なる断片に過ぎず，より目に見えやすい集合的な出来事からは切り離され，私たちの文化を揺るがすような大変動からも遠く隔てられているかのように見える。しかし，社会生活にとって重要なほとんどすべてのものは，こうした時間，空間，しぐさ（gestures），諸関係の微細な網の目のなかで明らかになる。この網の目を通じて，私たちがしていることの意味が創り出され，またこの網の目のなかにこそ，センセーショナルな出来事を解き放つエネルギーが眠っている¹⁾。

1) Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996 (= 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社, 2008年, 1頁)。

いまやカタストロフは、単に自然の問題ではない。単に核の問題でもなく、人間という種そのものが直面する、生体そして関係そのもののカタストロフとなっている。いわゆる「先進社会」のより先端部分で暮らすひとたちの半分が「悪性新生物（腫瘍）」という異物によって死ぬ、さらにその半分は、心疾患で死ぬ、これはまさに、現代社会のシステムがそこに暮らすほとんど四分の三の人々の生体に社会的な病をもたらすという「劇的な収支決算」となっている。この個々の生体のカタストロフという面から現代社会を捉えなおさねばならないと私は確信している。まだ多くのひとによっては語られていないことなのかもしれないが、この生体的関係のカタストロフ（la catastrofe biologica e relazionale della specie umana）は、まさにより深く根本的なものだ²⁾。

1 はじめに——学術的な問いと本稿の位置

本稿は、中央大学社会科学研究所のヨーロッパ研究ネットワーク³⁾を母体として着手された共同研究チームである「うごきの比較学（“Comparatology” of nascent processes/moments）」⁴⁾

2) Alberto Melucci, “Homines patientes. Sociological Explorations (Homines patientes. Esplorazione sociologica)”, presso l’Università Hitotsubashi di Tokyo, 2000 (=新原道信「A. メルッチの“境界領域の社会学”——2000年5月日本での講演と2008年10月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学20号(通巻233号), 2010年, 51頁)。

3) ヨーロッパ研究ネットワークは、1996年4月より、第6・7代の社会科学研究所長(1994～2000年)であった古城利明教授により、細分化された研究を架橋するグローバル・ナショナル・リージョナルの総体把握・全景把握、ローカルの実態把握に即したトランスナショナルで領域横断的な共同研究を企図として研究活動を行ってきた。その後、個別の研究プロジェクトによる研究チームとして研究活動を継承・発展させるかたちへと再編した。この流れのなかで、「3.11以降の惑星社会」(2013～2015年度)、「惑星社会と臨場・臨床の智」(2016～2018年度)として活動を続け、現在は「うごきの比較学」(2019～2022年度)により研究成果を蓄積している。

4) 本調査研究チームは、「可視的局面」の背後で諸個人の深部において不断に醸成されている「潜在的局面」に着目し、その“うごき(nascent moments of relationship)”と、社会そのものの変動(transformation/transcendence/changing form/metamorphose)の関係性とその動態を把握することをめざしている。とりわけ、個々人の深部における微細でリフレクシヴ(再帰的/内省的/照射的)な“うごき(nascent processes, processi nascenti)”に着目し、その“うごき”の方向性に応ずるかたちでの社会構想—問題のなかに予め答えが含まれているような「問題解決」ではなく既存の領域を横断して新たな問いを立てる“比較学(Comparatology, comparatologia)”の創出を企図するものである。

“比較学(Comparatology)”は、「ビッグデータ」を駆使したcomparative study, comparative methodology(対象との相対的距離を確保した計測・観測)とは異なるアプローチであり、新たな比較の〈メソドロジー/メソッズ〉の構築をめざす。既知の分類による属性の比較にとどまらず、別ものとされたもの同士の“未発の状態(nascent state)”に着目し、関係性の“うごき(nascent moments of relationship)”, すなわち関係性の在り方そのものが変化していく社会文化的プロセスを“捉えかえす(comprendere di nuovo, comprehend again)”ことを企図するものである。“うごきの比較学(“Comparatology” of nascent processes/moments)”については、下記の論稿を参照されたい:

・新原道信『「うごきの場に居合わせる」再考—3.11以降の惑星社会の諸問題に応答するために(3)』『中央大学社会科学研究所年報』20号, 2016年, 15-32頁。

(2019～2022年度)の2020年度の研究成果の一端を示すものである。

本調査研究チームは、イタリアの社会学者 A. メルッチ (Alberto Melucci) の“惑星社会論 (vision of planetary society)”と A. メルレル (Alberto Merler) の“社会文化的な島嶼性論 (visione di insularità socio-culturale)”を現代社会認識の〈エピステモロジー〉としている。両者との協業を統合した〈エピステモロジー／メソドロジー／メソツズ〉となるのが、“惑星社会のフィールドワーク (Exploring Fieldwork in the Planetary Society)”である⁵⁾。

“うごきの比較学”は、〈臨床社会学／コミュニティ研究／地域学／比較学〉の有機的結びつきにより構成される複合・重合的なメソドロジーである。〈臨床社会学〉のメソドロジーとしては、メルッチ夫妻との間で“療法的でリフレクシヴな調査研究 (Therapeutic and Reflexive Research (T&R))”⁶⁾を、〈コミュニティ研究〉のメソドロジーとしては、メルレルとの間で“コミュニティを基盤とする参与的調査研究 (Community-Based Participatory Research (CBPR))”⁷⁾

・新原道信「A. メルレルの“社会文化的な島々”から世界をみる試み—“境界領域の智”への社会学的探求 (1)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 27 号 (通巻 268 号), 2017 年, 73-96 頁。

・新原道信「“うごきの比較学”にむけて—惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求 (1)」『中央大学社会科学研究所年報』21 号, 2017 年, 67-93 頁。

・新原道信「“うごきの比較学”から見た国境地域—惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求 (2)」『中央大学社会科学研究所年報』22 号, 2018 年, 15-31 頁。

“未発の状態 (stato nascente)”については、新原道信「“未発の状態／未発の社会運動”をとらえるために—3.11 以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求 (2)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 25 号 (通巻 258 号), 2015 年, 43-68 頁を参照されたい。

5) 目下、構築の途上にある“惑星社会のフィールドワーク”については、新原道信「“惑星社会のフィールドワーク”の条件—惑星社会の諸問題に应答する“うごきの比較学” (1)」『中央大学社会科学研究所年報』24 号, 2020 年, 127-160 頁をひとまずは参照されたい。

6) メルッチは、編著書『リフレクシヴ・ソシオロジーにむけて—質的調査と文化』(Alberto Melucci (a cura di), *Verso una sociologia riflessiva: Ricerca qualitativa e cultura*, Bologna: Il Mulino, 1998)において、質的調査研究を中心とした多角的社会調査法の成果をとりまとめている。“療法的でリフレクシヴな調査研究”は、同書以後のメルッチ最晩年の企図を再構成したメソドロジーである。メルッチの最晩年の企図については、新原道信「A. メルッチの“未発のリフレクション”—痛むひとの“臨場・臨床の智”と“限界状況の想像／創造力”」矢澤修次郎編『再帰的=反省社会学の地平』東信堂, 2017 年, 105-141 頁を参照されたい。

7) “コミュニティを基盤とする参与的調査研究 (Community-Based Participatory Research (CBPR))”は、メルレルの研究グループ FOIST/IntHum と新原が実践してきた方法であり (Alberto Merler, *Altri scenari. Verso il distretto dell'economia sociale*, Milano: Franco Angeli, 2011), K. レヴィン, O. ボルダ, P. フレイレなどの流れを汲む。W. F. ホワイットが『ストリート・コーナー・ソサエティ』の経験に基づき提唱した「参与的行為調査 (Participatory Action Research)」(William F. Whyte, *Street Corner Society: The Social Structure of An Italian Slum*, Fourth Edition, Chicago: The University of Chicago Press, 1993 (=奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣, 2000 年))と、ニューヨーク・ハーレムの公営団地でエスノグラフィック・フィールドワーク (EFW) を実践してきた二人の社会学者 T. ウィリアムズ (Terry Williams) と W. コーンブルム (William Kornblum) の方法と多くの共通点を持っている: Terry Williams and William Kornblum, *The uptown kids: struggle and hope in the projects*, New York: Grosset/Putnam Book, 1994 (=中村寛訳『アッ

を練り上げてきた。

〈地域学 (Terrainology, terranologia)〉は、《社会構造の“移行 (passaggio)”に着目し、そこに生起する“事柄の理”を捉え、個々人と社会の“メタモルフォーゼ”の条件を析出する営み》である。〈地域学〉のメソドロジーとしては、メルレルとの間では、イタリア・ヨーロッパ、地中海、バルト海、大西洋、アフリカ、南米、日本と東アジアで、“対話的／対位的なフィールドワーク (dialogic and poly/dis-phonical Fieldwork)”，さらには“複合・重合的に練り上げられたフィールドワーク (Fieldwork elaborated in a composite way)”を実践してきた⁸⁾。

また、“生存の場としての地域社会の探求 (Exploring region and community/territory/earth for sustainable ways of being)”という観点から、地域で生きる“生身の身体 (corporalità cruda, raw corporeality)”の“うごき (“個々人の内なる変動”や“ちょっとした不具合 (piccoli mali, minor ailments)”)”に着目した。メルッチとの間では、白血病となりフィールドに出られない条件下で生老病死そのもののフィールドワークをとともにすすめた。2001年の彼の死の後には、彼の共同研究者でもあったアンナ夫人 (Anna Melucci-Fabbrini) との間で、メルッチの遺志を引き継ぎ、“聴くことの社会学 (sociologia di ascolto, sociology of listening to the voice of 'living witnesses')”による“臨場・臨床の智 (cumscientia ex klinikós, wisdom to facing and being with raw reality)”の構築を企図してきた⁹⁾。

〈比較学 (Comparatology)〉は、上記のメソドロジーを組み合わせた“人間と社会のうごきに対して開かれた理論 (theories open to the nascent moments, teorie disponibili verso i momenti

プタウン・キッズ—ニューヨーク・ハーレムの公営団地とストリート文化』大月書店、2010年)。

8) これまで、メルレルとの間では、沖縄、北海道、サルデーニャ (イタリア自治州)、コルシカ (フランス)、ケルン (ドイツ)、エステルズンド、ストックホルム (スウェーデン)、コペンハーゲン・ロスキレ (デンマーク)、サンパウロ・リオデジャネイロ・エスピリトサント (ブラジル)、川崎、横浜・鶴見、香港・マカオ (中国への返還以前)、済州島 (韓国)、リスボン (ポルトガル)、アゾレス (ポルトガル自治行政区)、カーボベルデ (カーボベルデ)、トレンティーノ＝アルト・アディジェとアルプス山間地 (イタリア・オーストリア・スイスの間国境地域)、フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリアとゴリツィア／ノヴァ・ゴリツィア (イタリア・オーストリア・スロヴェニアの間国境地域)、トリエステからイストリア半島 (イタリア・スロヴェニア・クロアチアの間国境地域)、ランペドゥーザ (イタリア最南端の島)、セウタ、メリリヤ (モロッコ内のスペインの「飛び地」)、ジブラルタル (スペイン内のイギリスの「飛び地」)、マラガ、アルヘシラス、コスタ・デル・ソル (スペイン) など、「周辺」「辺境」「周縁」，“端／果て (punta estrema/finis mundi)”とされる場所でのフィールドワークをとともにしてきた。新原道信「“惑星社会のフィールドワーク”の条件—惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学”(1)」『中央大学社会科学研究所年報』24号、2020年、127-160頁においては、これまでのフィールドワークにおける“対比・対話・対位”とその“複合・重合”のプロセスを確認し、サルデーニャ北西部のアジナーラ島でのフィールドワークを事例として取り上げている。

9) 生老病死のフィールドワークについては、新原道信「生という不治の病を生きるひと・聴くことの社会学・未発の社会運動—A.メルッチの未発の社会理論」東北社会学研究会『社会学研究』第76号、2004年、99-133頁を参照されたい。

nascenti)”であり、「開かれ、ダイナミックで、小さいもの」¹⁰⁾という特徴を持つ。「グローバル社会で生起する地球規模の諸問題 (global issues)”の背後に在る“根本問題 (fundamental problem)”を切り出し、想定内の「問題解決」ではない“新たな問いを立てる (formulating new questions)”ことを目的として、“かたちを変えつつうごいていく (changing form)”ことを生命線とすべきものであった。

しかしながら、“うごきの比較学”による“惑星社会のフィールドワーク (Exploring Fieldwork in the Planetary Society)”は、「新型コロナウイルス感染症 (COVID-19, Coronavirus Disease 2019)」のもとで、その意味を問い直す必要に迫られている。惑星の隅々まで及ぶ開発の力によって、人や物資の移動が迅速かつ大量となるなかで、グローバル社会は、歴史上体験したことのない速度で、「感染症」が拡がり、滞留し続けている。惑星地球 (the planet Earth) というひとつの「船」の内側で、短期間にひとつの出来事の影響が伝播してしまう社会、「他人事」などない惑星社会 (planetary society) を私たちは生きている。

そこでは、人や物資のみならず、資本も情報も含めた流動化・システム化・ネットワーク化を加速化するグローバル社会、境界線を引くことで成立してきた国家や地域、コミュニティの在り方が、根底から問われている。私たちは、惑星地球規模の「網の目」上に拡がるネットワークのなかで、国家や地域の境界を越え、世界を飛び回り、情報の迷宮を「雄飛」する可能性を獲得した。他方、私たちの生活・生存の場である惑星は、開発可能な「外部」あるいは「フロンティア」を消失し、その限界に直面した。「成長」へと向かう未来も失われ、いまや私たちは、思っていたほど広くも無限でもない惑星地球に暮らしている。科学者 J. ロックストローム (Johan Rockström) は、この状況を、「大きな世界、小さな惑星 (Big World Small Planet)」であるとし、「プラネタリー・バウンダリー (地球の限界)」を越えてしまう前に、社会の在り方、開発・発展の在り方を変えていくべきだとしている¹¹⁾。

もし、「新型コロナウイルス感染症」に直面していなければ、本研究チームは、「基地の比較学」¹²⁾による宮古・石垣などでのフィールドワーク、「壁」の増殖に対峙する“共存・共在の

10) Václav Havel, *Moc bezmocných, Spisy, sv.4. Eseje a jiné texty z let 1970-1989. Dálkový výslech*, Praha: Torst, 1999 (=阿部賢一訳『力なき者たちの力』人文書院, 2019年, 116頁)。

11) Johan Rockström and Mattias Klum, *Big world small planet: abundance within planetary boundaries*, Stockholm: Max Ström, 2015 (=谷淳也・森秀行他訳『小さな地球の大きな世界—プラネタリー・バウンダリーと持続可能な開発』丸善出版, 2018年)。

12) 国家や地方自治体が計画・政策的に設置する巨大な施設(拠点)のメタファーとしての“基地 (base, camp, installation)”一軍事施設のみならず、核施設、空港、清掃工場・最終処分場、下水処理場、火葬場、食肉処理施設、石油備蓄基地など、「迷惑施設 (NIMBY)」と称される施設—に着目する研究である。長期的に持続してきた地域生活のなかに「侵入」してきた“基地”による「断裂」とそこでの持続・抵抗、すなわち地域開発/地域の「自立」の社会文化的プロセス(波動)を“社会文化的な島々”の理論から捉え直すことで、地域社会研究に新たな視点を提供することを目標とするものである。自衛隊基地配備計画問題に直面している石垣島と宮古島、立川・砂川の基地闘争跡地、長崎県川

智”]¹³⁾によるブラジル・イタリアでのフィールドワークにより，“うごきの比較学”を錬磨していくはずだった。しかしながらいま、「地球の裏側」へも足を伸ばすフィールドワークを可能とっていた現代社会とそこでの調査研究者の在り方（ways of being）そのものを、あらためて問い直す必要に迫られている。ここから、本稿では、以下の“問いかけ（interrogazione, ask questions）”を試みる：

フィールドに出られないとき、フィールドワークに何が出来るのか？“フィールドに出られないフィールドワーク（Fieldwork that cannot appear in the field, ricerca sul campo che non può apparire nel campo）”という経験は、人間と社会の“うごき”を捉える試みに何をもたらすのか？

本稿においては、2020年1月から2021年1月にかけての“フィールドに出られないフィールドワーク”という経験のプロセス／モメントを検討する（この時期の特定の“うごきの場”そのものの意味を検証するのは、次なる課題となる）。

以下、第2章と第3章では、2020年4月の時点で、「新型コロナウイルス感染症」のもとで、いかなる同時代認識をしたのか（「私たちはいまどこにいるのか」）、“フィールドに出られないフィールドワーク”で何をしようとしたのかを確認する¹⁴⁾。第4章と第5章では、“フィールドに出られないフィールドワーク”という条件下で、人間と社会の“うごき”を捉えるためにいかなる考察をしたのか、とりわけ、「虫の目／鳥の目」を組み直す試みについて確認する。第6章では、「地球の裏側」，“端／果て（punta estrema/finis mundi）”に足を伸ばすという流儀（own ways）を剥ぎ取られた状態——“フィールドに出られないフィールドワーク”によって，“うごきの比較学”による“惑星社会のフィールドワーク”がいかに錬磨され得るかを確認する。

棚の基地跡地と佐世保、イタリアの国境島嶼であるランベドゥーザ島とラ・マッダレーナ諸島がフィールドとして想定されていた。

13) 「壁」の増殖に対峙する“共存・共在の智”にむけての探求型フィールドワーク（Exploring Fieldwork towards a “wisdom of coexistence” to confront the proliferation of ‘barrier’）では、「異端・異物を排除・根絶する力」の噴出である世界各地での“「壁」の増殖”を、現代社会の焦眉の問題として捉え、この潮流に対するオルタナティブとしての“共存・共在の智（wisdom of coexistence）”を、ブラジルやイタリアなどでのフィールドワークによって明らかにする予定であった。

14) ここでの文章は、2020年4月12日と4月17日に、講義ノートのかたちで学生に提示し、その後、中央大学文学部・文学研究科社会学専攻のHPに upload している。Cf. <https://sociology.r.chuo.ac.jp/member/detail/76>

2 “フィールドに出られない”という状況での同時代認識——ウイルスと人間、社会現象としての「ウイルス」¹⁵⁾ 2020.04.12

“うごきの比較学”による“惑星社会のフィールドワーク”は，“フィールドに出られない”という状況・条件下においても，それ自体をフィールドとすることが，あらかじめ組み込まれている．現在進行中の「コロナウイルス感染拡大」のように，事態がどのように移行・変転していくのかを見定められない“未発の状態 (stato nascente, nascent state)”¹⁶⁾，岐路にたたずんでいる¹⁷⁾ような状況においても／おいてこそである．

この発想は，文化人類学者 R. マーフィー (Robert F. Murphy) の著書『ボディ・サイレント』の「旅で見聞したことを書き記し報告するのは人類学者たるものの務めだろう——それが地球の裏側へのはるかな旅であれ，あるいは，足元にポツカリと開いた暗い穴の中への，これまたはるかな旅であれ」¹⁸⁾という言葉に由来している．マーフィーは，アマゾンやニジェール，ナイジェリアへのフィールドワークを積み重ねた後，神経難病となり，その病の社会文化的プロセスを“描き遺した”．メルレルとの間では「地球の裏側へのはるかな旅」を，メルッチとの間では「足元にポツカリと開いた暗い穴の中への，これまたはるかな旅」をともにしてきたことに

15) この文章は，講義ノートのかたちで学生に提示（授業支援システム manaba に upload）し，その後，中央大学文学部・文学研究科社会学専攻 HP 内の教員紹介において，「高校生や大学生に向けてメッセージ」として 2020 年 8 月 30 付で upload している． Cf. <https://sociology.r.chuo-u.ac.jp/member/detail/76>

16) “未発の状態 (stato nascente, nascent state)”については，新原道信「“未発の状態／未発の社会運動”をとらえるために—3.11 以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求 (2)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 25 号 (通巻 258 号) 2015 年，43-68 頁を参照されたい．

17) 「岐路にたたずむ」という認識の背景には，「惑星地球／内なる惑星 (身体)」双方の生体的関係のフィールドにおいて，有限性の問題を突きつけられ，いま「私たちは，まさにはじめて本当の意味で人類史の岐路に立って」というメルッチとの対話がある (Alberto Melucci, “Sociology of Listening, Listening to Sociology”, 2000 (新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域—自己決定・協働，その主体 地域社会学会年報 13』ハーベスト社，2001 年，2-3 頁および，新原道信「A. メルッチの「創造力と驚嘆する力」をめぐって—3.11 以降の惑星社会の諸問題に回答するために (1)」『中央大学社会科学研究所年報』18 号，2014 年，53-72 頁)．加えて，下記の鹿野政直の指摘から示唆を受けている：

従来まったく別物と考えられていた正常と異常，先進と後進，理性と狂気，健康と病气，生と死等々の概念が意外に近いばかりでなく，むしろ一個人内でも一社会内でも交錯しているのがかえって常態との意識は，こうして瀰漫しつつある．そのことは，人間や社会が，みずからも問題をかかえる存在と認めるのを迫られていることをも意味する．しかも行手が定かにみえぬままに，岐路に立っているという予感に間断なく襲われつつ，いやそれだけにまず，いまを認識しようとの意志，確認したいとの渴望が，高まっているとってよいだろう (鹿野政直『「鳥島」は入っているか—歴史意識の現在と歴史学』岩波書店，1988 年，146 頁)．

18) Robert F. Murphy, *The Body Silent-The Different World of the Disabled*, New York: W. W. Norton, 1990 [1987] (= 辻信一訳『ボディ・サイレント—病いと障害の人類学』平凡社，2006 年，16 頁)．

なる。

メルッチのみならず、メルレルとの間でも、それぞれの生老病死を「フィールド」とする経験を積み重ねており¹⁹⁾、日常が非日常へと変異した局面を「フィールド」とする経験を蓄積してきたはずではあった。しかしながら、今回の「新型コロナウイルス感染症」のもとで、その経験が、実際にどのように身体化された智として発揮されるかが、問い直されざるを得なかった。

ここでは、いかに responsive かつ reflexive に事態を捉え、“フィールドに出られない”という状況を「フィールド」としたデイリーワークをなすのかが焦点となる。デイリーワークの基本的な組成 (composizione, composition) は、第一に事実認識、何が起こっているかを理解することである。そして第二は、だからどうしようかということとなる。そこでまず、2020年4月12日の時点での同時代認識（「私たちはいまどこにいるのか」）を提示する²⁰⁾：

濁流のように押し寄せる社会の変動に歩調をあわせて変わっていく思考や判断の“裂け目 (spaccatura d'epoca/epoca di spaccatura)”を感知するための“基点／起点 (anchor points, punti d'appoggio)”となるべく、つたない言葉を“描き遺す”ことを試みたい。

私たちはいま何に直面しているのか？ そのウイルスは、2020年2月11日、SARS-CoV-2 (Severe acute respiratory syndrome coronavirus 2 の略称) と名付けられた (国際ウイルス分類委員会 (ICTV) による)。最初は、2020年の年明けに、中国湖北省武漢市で局地的に起こった「原因不明のウイルス性肺炎」の地域流行 (endemic) として認知された。しかしこの「肺炎」は急速かつ広範囲の流行 (epidemic) となり、各地で突発的な規模拡大 (outbreak, overshoot) を引き起こし、かつてないスピードで地球規模の「パンデミック (pandemic)」となったことが、3月11日、イタリアの旧植民地であったエリトリアに生まれた WHO の事務局長テドロス (Tedros Adhanom Ghebreyesus) によって表明された。

中国では、武漢は「封鎖」、国内のひとの移動は制限され、日本では、大型クルーズ船の乗客や中国からの入国者を「警戒」することで対応しようとした。しかし、中国からの「第

19) 新原道信「“痛み／傷み／悼み”をともにする」新原道信『旅をして、出会い、ともに考える—大学で初めてフィールドワークをするひとのために』中央大学出版部、2011年、113-136頁を参照されたい。

20) 同時代の全景把握，“大きくつかむ (begreifen, comprendere)”という発想は、「全体的なことに人間的な判断をする」とした加藤周一の知的営為に影響を受けている。“大きくつかむ”は、ヘーゲルの言葉でいえば、begreifendes Erkennen、単に分析的に考える知性や、感性と知性の分裂の間に立つという意味での観念的でしかない理性でなく、概念的に大きくつかむという認識の在り方である。加藤周一は、全体的なことに対して人間的な判断をして方向を示すことが困難になるなかで、1968年のプラハで「なぜ鉄砲が撃たれざるを得なかったのか」を再考しようとした。加藤によれば、明治以降の日本社会は、非人格化、非個人化、非人間化の犠牲をはらっての発展だった。システム化のなかで全体的なことに対して人間的な判断をして方向を示すことが困難になってきているとした。Cf. 加藤周一、小森陽一・成田龍一編『言葉と戦車を見すえて』筑摩書房、2009年。

一波」に加えて、ヨーロッパ他の世界各地からの「第二波」が、すでにこの列島に侵入していた。

2020年2月26日のスポーツ・文化イベントの開催自粛要請に続いて、27日夕刻には、全国すべての小中高校と特別支援学校に対して、3月2日からの臨時休校が「要請」された。3月5日には、検疫への対応をめぐる、「積極果断」という言葉が首相から発せられ、入国拒否等の措置が決められた。「この1～2週間」での「問題の収束」をめざす首相の突然の「果断」は、ここまでの“生身の現実から目をそらす思考態度 (mind set of looking away from the raw reality)”と表裏一体をなしている。

ヨーロッパ各国の首脳は、「これは戦争だ」「いまは非常事態だ」という言葉を発した。「特別な」状況下で個人々の権利が制限されるのは「あたりまえ」とあるという言論が飛び交い、イタリア、スペイン、フランスなど、各国政府は、「都市封鎖」や「全国封鎖」を発令した。これにともない、航空機によるひとの移動は大幅に減少し、グローバル社会、とりわけ、“移動・転変する都市 (città in passaggio, cities in transition)”の生活は突然変わった。

2020年3月13日、「新型インフルエンザ等対策特別措置法」(2012年制定)に新型コロナウイルス感染症を追加した改正案が成立した。その一方で、「果断」の先の「緊急事態宣言」は、遅れて4月7日に「発出」された(「発令」でなく、この言葉が選ばれた)。「せめて、あと1週間早ければ」「このままでは医療崩壊が起こり、何十万の死者が見込まれる」といった臨床の現場からの悲鳴は届かず、「政治的判断」によって、「日銭」でなんとか日々の暮らしを「しのいで」きた生活者、周辺の労働に従事する人々がより大きく翻弄され、もっとも感染のリスクが高い場所に放置された。

1986年4月26日の「チェルノブイリ」、2011年の「3.11」という「たった一つの事故」がもたらしたリスクは、その後、ほとんど消失することなく、地球と私たちの身心に影響を与え続けている。そしていま、人間がまだ免疫をもたないウイルスは、この惑星に残存し続け、繰り返し感染の「波」がやって来る。「宇宙船地球号 (Spaceship Earth)」のどこにいても、すべての人々、とりわけ社会的に弱い立場を生きざるを得ない人々のもとに、「パンデミック」の「厄災」が押し寄せる。どんなに扉を閉め、「封鎖」しようとしても、完全に押しとどめることなど、ましてや根絶・排除することなど出来はしない。

最初は「対岸の火事」で始まり、その“他人事 (not my cause, misfortune of someone else)”は、「中国からヨーロッパやアメリカに『転移』したが、日本は無事だ」と思いたい、あるいはそうあってほしいと願った。しかしその不条理 (absurdus) な「厄災 (disastro assurdo, absurd disaster)」は、ひたひたと、きわめて急速に、自分に迫ってきた。私たちは、“選択的盲目 (selective blindness, cecità selettiva)”, “生身の現実から目をそらす思考

態度 (impostazione mentale di distogliere lo sguardo dalla realtà cruda)” “故意の近視眼 (intentional myopia, 意図的に目を閉ざし生身の現実に対して心に壁をつくる性向)” による場当たりの反応 (reaction), あるいは “没参加 (dissociate/disengage oneself)”, “忘我・自失 (raptus)” のなかで, 臨場感を喪失し, 臨床の智を欠いたまま, 右往左往し続けている。しかも妙に「順応」しながら……。

特別なウイルスなのではない。実はすでに常にあった「想定外」に対する現代文明の脆弱さが, 「コロナウイルス」によって試されているだけだ。人間も含めたすべての多細胞生物とともに, 微細な構造体であるウイルスは存在し続けた。惑星の隅々まで開発がすすみ, ヒトやモノの移動, 迅速かつ大量となるなかで, つまりは社会そのものの根本的なモビリティの変化によって, 必然的に生起し勃発した出来事であった。

密集と移動が極大化したグローバル社会の帰結として, 歴史上, 体験したことのない速度での「パンデミック (語源的には, ギリシア語の *pandemos*, つまりは, すべての [pan], 民衆: [demos] が直面する事態)」が起こっている。仮想現実により, 対面を減じることに成功したグローバル社会が, 密集して対面するヒトからヒトへの感染によって急速に感染症を拡散し, 孤絶し閉塞する個々人が, インターネット上でかろうじて自らを「つなぎとめる」という何重にも皮肉な現象が起こっている。

惑星地球というひとつの「船 (Spaceship Earth)」の内側で, あっという間にひとつの出来事の影響が伝播してしまう社会, 「他人事」などない “惑星社会 (planetary society)” の “見知らぬ明日 (unfathomed future)”²¹⁾ を, 私たちは生きている。「チェルノブイリ」や「3.11」がそうであったように, 「新型コロナウイルスによる疾患 (COVID-19, Coronavirus disease 2019)」を「きっかけ (Trigger)」として, すでに在った “惑星社会の複合的問題 (the multiple problems of the planetary society)” を顕在化させた。問題は「解決」という「型」に馴染むことのないジレンマ, アポリアとして私たちにつきつけられ, “見知らぬ明日” をこれからもずっと生きていくことになる。

自分の／周囲の人間の感染を恐れ, 他者と接する「あたりまえ」の暮らしを喪失しつつある。親しいひとに対面することも, ふれることも出来ない, この不条理な日常のなかで, 何をするのか? いかにかことに臨むのか? いかにか “痛み／傷み／悼み (patientiae, doloris

21) この言葉は, SF作家小松左京の1968年の小説『見知らぬ明日』より示唆を受けている。1968年当時 (おそらく現在でも), 「辺境」としてイメージされるであろう中国の新疆ウイグル自治区に異星人が突然現れ, 一切の意思疎通もないままに攻撃され, 東京はわずか二ヶ月で, 無人の野となり, この先はたしてどうなるのかというところで小説は終わる:

今や, 誰も想像したこともない, 「見知らぬ明日」が訪れつつあった……「かつて人類が一度も体験したことのない戦争」は, どのように展開され, 人類は, どんな犠牲をはらわねばならないのか? はたして人類は存続を許されるのか? (小松左京『見知らぬ明日』角川春樹事務所, 1998年, 284-285頁)。

ex societas)”を分かち合うのか？ “見かけ倒しの拙速社会 (società fittizia e rapida, fictitious and rapid society)”において、誰かに「丸投げ」できず、逃げる場所もなく、「大丈夫」と言い聞かせても意味がないという事実になんとか向き合いつつ、どのように「答えなき問い」に応えることが出来るのか？

それでもなお、“問いかける (interrogando, asking questions to)”ことをあきらめないのだとしたら、パンデミックが、すでにあった社会構造の脆弱さ、「闇」と「痛み」、そのなかでのかすかな希望を顕在化させもするはずだと思いたい。

「専門性」をもった知的認識としては「困難だ」「無理だ」という「状況・条件」下で、葦のごとく弱い生身の人間として、ささやかな応答を試みる。「解決」困難な「パンデミック」, 「制御」や「統治」の困難、疫病を「封鎖」しようとして内側から崩壊していった古代アテネやローマから現代まで、人間の生み出した諸文明を想起しつつ、いま現に、リアルに起こっている“生身の現実”を“感知/感応”し、応答することを試みたい。

2001年9月12日に白血病で夭逝した社会学者メルッチは、こんな言葉を遺してくれた²²⁾：

謙虚に、慎ましく、自分の弱さと向き合い、おずおずと、失意のなかで、臆病に、汚れつつ、貧相でも、平凡でも、普通の言葉で、ゆっくりとしたうごきのなかで、“臨場・臨床の智”を私たちの身体に染みこませていこう。そのためには、私たちの存在のすべて、個性のすべて、身体のすべてを賭けて、具体的な生身の相手とかかわりをつくるしかないのだよ。

いま「出会ってしまった」「生身の現実 (realtà cruda, raw reality)”から逃げ出すことも出来ず、かといって「問題解決」のあてもなく、その場に佇みつつ、それでも何らかの“責任/応答力 (responsibility)”を発揮しようともがいている。そんな「ごくふつうの人間 (ordinary simple people)」として、「亡命」や「離脱」はできない閉じられた惑星社会のなかで、responsive/reflexiveに、contrapuntally and act poly/dis-phonicallyという姿勢で、プレーし続けるしかない：

何を？ 小さなことをこの惑星社会の異なる場でやり続ける。

どのように？ 立ち止まり、よく見て、耳を澄まし、現実にあふれ、考えることでしか突破できないものがあると信じようとしつつ、“端/果て”から、“低きより (humility, humble, umilta, humilis)をもって、高みから裁くのではなく、地上から、廢墟から)”と

22) 2000年10月そして2001年3月、ミラノの彼の自宅での筆者との対話のなかで発せられた言葉である。

いう在り方 (ways of being) で身心をうごかす。

たとえば、カミュの『ペスト』やボッカチオの『デカメロン』などの文学作品から学ぶこと。たとえば、アメリカから発生し、何度かの感染の「波」がやって来るなかで、強毒化していった「スペイン風邪」と呼ばれた1918年から1920年の「パンデミック」のような歴史的事実から学ぶこと。たとえば、電車のつり革をさわった後に、消毒することなくパンを食べたりしないこと。パックに入った惣菜を食べる場合は必ず表面を消毒するといった所作を身につけること。最悪の事態に備える (Prepare for the worst) の姿勢で日常を“組み直す (ricomporre, recompose)”こと。「小さなこと」から始めること。そして、失ったものを数えるのでなく、手元にあるものの可能性を生かすことだ。

2020年度のすべての授業は、このような問題意識に基づき行います。私たち誰にとっても、はじめてのことですので、協力しつつやっていきたいと思います。どうか、まず、自分の横にいる生身のひとたち、そして自分自身の身心の声を聴いてください。どこかにある「答え」を探すのでなく、いままで学んできた智を総動員して、「答えなき問い」に応えてくれることを願っています。

2020年4月12日 新原道信拝

3 “フィールドに出られない”ときのフィールドワーク——「新型コロナウイルス感染症」が拡大する社会を生きるために²³⁾ 2020.04.17

2章では、新たな事態が認識され始めた段階での同時代認識を、「つまびらか」²⁴⁾にした。その理由は、いま生起しつつある問題を“感知 (perceiving/sensing/becoming aware)”，“感応 (responding/sympathizing/resonating)”しきれない自分自身の限界も含めて，“思行 (想念と行為の境界領域)”の現在地（「いま，ここ」）を開示することが，“うごきの比較学”にとって重

23) この文章は、講義ノートのかたちで学生に提示（授業支援システム manaba に upload）し、その後、2020年8月18日付で、中央大学文学部・文学研究科社会学専攻のHP内のブログとして upload している。Cf. 「新型コロナウイルス (COVID-19)」が感染拡大する社会を生きるために（新原道信）中央大学文学部・大学院文学研究科社会学専攻 (chuo-u.ac.jp) <https://sociology.r.chuo-u.ac.jp/blog/detail/61>

24) 「つたない」ものを開示することの意味は、「人ができるのはただ、なんであれ、自分のいだいでいる意見を、自分はどのようにして、いやくようになったのかをつまびらかにすることだけである」（Virginia Woolf, *A room of one's own*, London: Hogarth Press, 1929（＝川本静子訳『自分だけの部屋』みすず書房、1999年、5頁））というV. ウルフ (Virginia Woolf) の言葉を引用して、「わが身の欠点をさらけだしつつ、整合的な議論を展開する」（Edward W. Said, *Representations of the intellectual: the 1993 Reith lectures*, London: Vintage, 1929（＝大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社、1998年、70頁））としたE. サイド (Edward W. Said) の知的姿勢に触発されている。

要な営みであることによる。

上記の文章の開示に続いて、2章冒頭で述べた“フィールドに出られない”という状況・条件下でのデイリーワークの基本的な組成の二番目である「だからどうしようか」という観点から、2020年4月17日付けで下記の文章（「新型コロナウイルス感染症」が拡大する社会を生きるために）を学生に提示している：

はじめに——“見知らぬ明日”を生きる

いまみなさんは、たいへんな不安やストレス、疲労感のなかで暮らしていることと思います。「突然、出現したウイルス」への特効薬の処方箋もなく、いつ「収束（解決）」するのかもわからず、見えない相手に脅える日々が続いています。いままではたいして気にもしなかった「ちょっとした不具合・不調（piccoli mali, minor ailment）」（A. メルッチ²⁵⁾）であっても、「突然、重症化するかもしれない」「目の前にいる他人のみならず、家族や友人が、実は『感染者』かもしれない」「ドアノブや手すり、つり革、スーパーのお総菜や紙幣、ありとあらゆるヒトやモノが危険だ」——そんな感覚に襲われ、不信のなか、いままであまり見なかったニュースをチェックしています。そこでは、デマも飛び交い、「コロナ差別」も増大し、家庭内でのストレスやケンカ、虐待が増大しています。

ついさきほどまで、私たちは、インターネットをはじめとした各種のメディアを通じて実に容易に、「世界を知る」あるいは「飛び回る」ことが可能だと思っていました。たとえば、あなたは、大西洋や南太平洋に浮かぶ「常夏のリゾート」で暮らす人々の映像、ヨーロッパの美しい都市の街並みや「すてきなお店」、あるいは、「アジアやアフリカで」親や夫を殺された裸足の女性や子供達の映像などを、快適な部屋のソファでスナック菓子を食べながら見ることができていました。

今回の「コロナウイルス」も、最初は、「中国の武漢」からの映像でした。そのうち、ヨーロッパやアメリカ、そしてクルーズ船の映像などに変わり、いつの間にか、「休校」「出入禁止」「医療崩壊」「緊急事態宣言」「大恐慌以来の景気後退」と変わってきています。すぐそこまで来ているかもしれないという不安の一方で、なかなか実感がわいてこない、「いろいろ考えなきゃ」と思いつつも、ものすごい量のニュースやメール、SNSに反応するだけで一日が過ぎていってしまいます。

古代ギリシア・アテナイの伝染病から、14世紀ヨーロッパの「黒死病」、1492年以降の「新大陸」における先住民の大量死と文明の崩壊、19世紀前半ヨーロッパの都市で露呈し

25) Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996 (=新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフー惑星社会における人間と意味』ハーベスト社, 2008年, 101-105頁)。

た「都市の病」、20世紀前半に「スペイン風邪」と呼ばれた「パンデミック」等々——これまでの歴史においても、大きな感染症は、震災や津波など同じく、社会を大きく変えてきました。歴史から学ぶなら、おそらく、ついさきほどまで享受してきた「日常」がもどることはなく、私たちは、“見知らぬ明日 (unfathomed future)”を生きていくことになるのかもしれない。

2002年11月の中国SARS, 2012年9月中東のMERS (Middle East respiratory syndrome) などの「重症急性呼吸器症候群 = SARS (Severe acute respiratory syndrome)」、2009年新型インフルエンザウイルスの感染拡大など、歴史のなかでこれまで見られなかったほどの短い間隔で感染症が発生しています。感染症の拡大は、近現代の人間の活動がもたらした「異常気象」、その背後にある生態系の無秩序な破壊、野生動物の生物圏への「侵略」と無縁ではありません。疫学的な病だけでなく、悪性腫瘍や身心の病、他者への不信や無関心、差別・暴力などの「社会の病」ともむすびついています。

このような、あまり見たくもない、考えたくもない、しかし、眼前に迫ってきた、おそらく根絶・排除することは出来ない問題との辛抱強いつきあい方、様々な“生体的関係的カタストロフ (biological and relational catastrophe of human species)” (メルッチ) が繰り返し多発する社会を生きていくためにはどうしたらよいのでしょうか？

フィールドワークに何ができるか？

私が専門として、学生のみなさんに教えてきたのは、都市や地域の社会学と（国際）フィールドワークです。この間、いろいろなひとたちから、「フィールドワーク（野外調査）が出来なくなってたいへんですね」と言われました。しかし、実は、「外出できない」ことは、フィールドワークにとってそれほど致命的なことではありません。むしろ、いま起こっている“見知らぬ明日”の真っ最中でこそ、力を発揮するようなフィールドワークがあると、私は思っています。

たしかに「フィールドワーク」という言葉は、「フィールド（野外）」での調査（ワーク）という意味がありますが、「フィールドワーカー（フィールドワークするひと）」という言葉にはもっと広く深い意味があります。「フィールドワーク」は、野外調査をしていないとき、日々の暮らしを「フィールド」として、自覚的に行うべき「デイリーワーク（日々の“不断・普段の営み”）」が含まれています。むしろ「机の前で」の「勉強の時間」（「デスクワーク」）以外に、朝起きてニュースを見ているとき、新聞の記事を読んでいるとき、犬の散歩、電車のなか、食事中、風呂やトイレのなかで、つまり、日常生活のあらゆる瞬間、様々な場面で、臨機応変に、“臨場・臨床の場”で、“生身の現実”を観察し、コメントし（ツッコミ、疑問を持ち、つぶやき）、理解しようとすることです。

いま私たちが直面している日常は、「非日常」的なものです。しかし、この状況が、かなり長く続いていく、さらには、繰り返しまたやっていくことになるかもしれません。この不確定性や流動性があたりまえとなった時代を生きるためには、「予測困難なパターンの未来 (a less predictable pattern for the future) ……決まり切ったライフ・サイクルからはずれた生活を営む可能性 (more possibility of organizing life with a less tidy life-cycle)」(J. ガルトゥング)²⁶⁾を意識し、身体化する必要がありそうです。「感染拡大」のなかで、アスリートのように、食事・睡眠・筋トレ・ストレスコントロールなど日常の実践を統治し、自分が属する組織や集団、コミュニティや地域社会それぞれの場で“かたちを変えつつうごいていき (changing form)”，「場」を創り続けるしかありません。

たしかに先行き不安でたいへんな状況ですが、「フィールドワーク」では、突然の相手の状況で、予定が変わったり、現地に行けなくなったり、帰れなくなったり、いろいろ大切なものを失ったりと様々なことを体験します。その結果、何かを「うまくやる」力というよりは、「うまくいかないときでもなにかは出来る」力を養うことができます。そこでいま、私は、みなさんに、2020年度の授業を始めるにあたって、“フィールドに出られないフィールドワーク (Fieldwork that cannot appear in the field)”のための課題を提案したいと思います。

フィールドに出られないときの「虫の目／鳥の目」のフィールドワーク

現実のフィールドに出られるときでも出られないときでも、基本となるのは、「虫の目」と「鳥の目」で現実を理解しようとし続けることです。

「虫の目」とは、できるだけ微細に、細やかに、小さな現実を見て、耳をすまし、そこで起こっている局所的な現実について、フィールドノーツとして“描き遺していく”という作業です。自分が“居合わせる”ことが出来た現実は小さな局所的なものではありますが、確かなものであり、情報の濁流のなかで自分をつなぎとめる足場となります。フィールドワークは、最初「野良仕事」と訳されていました。フィールドで日誌を書くという作業は、まさに「野良仕事」で、今回は、みなさんの「フィールド」が、自分の家とその周辺ということになるだけのことです。物理的な移動の範囲は狭いかもかもしれませんが、社会そのものは、惑星地球規模での急速な“うごき (nascent moments/processes, momenti/processi nascenti)”のなかであり、みなさんは、この歴史的社会的な転換点に“居合わせる (Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place)”ことに(自

26) Johan Galtung, “Sinking with Style”, Satish Kumar (edited with an Introduction), *The Schumacher lectures. Vol.2*, London: Blond & Briggs, 1984 (= 耕人舎グループ訳「シュマッハーの学校—永続する文明の条件」ダイヤモンド社, 1985年, 27頁).

宅に「いながら」にして）なっています。それゆえ、ぜひ、この“いながらのフィールドのなかで書くこと（writing in the field while being there by accident at the nascent moments）”をおすすめします。

「鳥の目」とは、“大きくつかむ”ことを試みるということです。自分が“居合わせる”ことの出来た小さな現実が、より大きな文脈、社会全体や歴史のなかでどんな意味をもっているのだらうと、自分の力で理解しようとすることです。つまりは、「特定の地域の文化の現場について、経験的な問いを発すること（誰が、何を、いつ、どこで、どのように、なぜ）であって、現場検証から一般原則を導き出す作業を避け、拒絶するのに、あえて理論家を気どる必要もない。私たちに必要なのは、背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析し、自分が行ったケース・スタディに意味づけをすること」（M. モリス）²⁷⁾です。

この「虫の目／鳥の目」、「微細な変化を見る／大きくつかむ」を基本として、当面の課題を以下に提案したいと思います。

フィールドに出られないときの「虫の目」のフィールドワーク——“大量で詳細な記述法”による日誌（フィールドノート）の作成

私が担当する授業では、「デイリーワーク」として、自分の身の回りや世界の“端／果て”で起こっていることを、どう理解したのかを書き／描きのこす（writing down）、フィールドのなかで書く（writing in the field, writing while committed）という、“大量で詳細な記述法（methods of acumen, keeping perception/keeping memories）”を体験学習してもらっています。ぜひいま起こっている社会現象そのものを「フィールド」として、社会や自分がどのような“うごき（nascent moments/processes, momenti/processi nascenti）”を顕在化させ、そこにはいかなる意味が潜在しているのかを“描き遺す”ことをおすすめします：

- (1) まずは、自分にとって「空気」のように「あたりまえ」に存在してきた「身近な場」の記述です。ホームであったはずの場所が、突然、異質なもの、「異郷の地」になっていくかのような変化、とりわけ微細な変化について、気付いたことを“描き遺す”ことをしてください。少し時間が経つと、その変化は「自明」のものとなり、変化したことにはさへ気付かなくなります。自分の言葉で「日誌（フィールドノート）」を「遺して」おけば、過去の自分を通して、かつて存在していた社会・空間の特定の局面を、

27) Meaghan Morris, “Globalisation and its Discontents” presented to the Conference of the *Globalisation Australia*, 1999 (=大久保桂子「グローバリゼーションとその不満」『世界』2001年4月号, 2001年, 270-271頁).

歴史性のなかで捉えることが可能となります。

(2) 次に、自分に「縁」のある土地、関心のある「土地」の変化を身近な場所の変化と比較することです。以前暮らしていた場所や、訪れたことのある場所、縁のある人が暮らす場所、関心を持っていた場所など——少しだけでも生活した経験などあれば、インターネットからの情報だけだったとしても、その背後にある“生身の現実”を“感知／感応”するチャンスが増えます。

(3) さらに、これまで自分にとっての“端／果て”の出来事を考えることです。「グローバル社会」でもっとも疎外されているひとたち、たとえば、家庭内の虐待、解雇、スラムや難民キャンプの衛生状態などについて、考えてみるとよいです。「自分が考えるには、複雑あるいは深刻すぎて」と意図的あるいは非意識的に目をそらしてきた“ひとごと (not my cause, misfortune of someone else)”が、たやすく“わがこと (cause)”へと転換することに気付くチャンスが増えます。

「日誌 (フィールドノーツ)」の分量は自由、毎日でなくともかまいません。後になってしまえば忘れてしまう当面の出来事、感じたこと、考えたこと、連想したこと、想起したこと、整理できていなくてもよいので、“描き遺す”ことを試みてください。以下、①～⑤の参考資料を付けます：

【参考資料】

①観察法はフィールドワークの方法のひとつです。観察法によって、いま私たちが直面している「コロナウイルス」によって試されている現代社会、日本社会、自分、周囲のひとびと、様々なレベルのコミュニティ、自分が属している組織、報道、言論、等々を観察し、後から整理・分析するための基礎データを、現在進行形で蓄積してください。

②フィールドワークは、実際の野外調査や観察法のみならず、インタビューや複数名での談話なども含めた複合的方法であり、ドキュメントや数量的データも活用します。インターネットだけでなく、できるだけ多くの新聞・雑誌記事や報道番組なども見て、記録して行ってください。たとえば、私は、NHKと民放の複数のニュース番組、特集番組 (NHKスペシャル、ETV特集、BSスペシャル、民放のドキュメンタリー等々) を録画し、見るようにしています。「3.11」のときもそうでしたし、実は、2009年の「新型インフルエンザ」のときもそうだったのですが、「コロナ問題」は、すでに足元に在ったのに見ないようにしてきた“生身の現実”を直視し、新たな社会を始める分岐点となるでしょう。新たな社会を始めることとかかわって、ぜひ、様々なジャンルの作品にふれてください (たとえば小松左京『復活の日』、篠田節子『夏の災厄』、川端裕人『エビデミック』、映画『アウトブレイク』など)。その

他、各種のドキュメンタリー、特集番組などを見るとよいです。

- ③数量的データは、全体の趨勢（マクロ・トレンド）を把握するのに役立ちます。日々の変化を日誌のかたちで蓄積していきましょう。私の場合は、日本と世界、そして住んだことのあるイタリア、サルデーニャ州サッサリのデータを毎日確認しています*。
- ④質的データを蓄積します。イタリア他の友人と WhatsApp（ヨーロッパ版の LINE）やメールで連絡をとりあい、おたがいの観察・解釈を交換しています。質的方法としては、日々の観察や生活で、感じたこと、考えたこと、理解したことを日誌（フィールドノーツ）のかたちで書き残します。
- ⑤以上のようなことをしつつ、野外を自由に移動できないときでも、“臨場・臨床的な在り方（ways of being involved in the crude reality）”で、他者そして“生身の現実（realtà cruda, raw reality）”“生身の社会（living society: city, community and region）”と向き合うことができます。

いま起こっている「新型コロナウイルス（COVID-19）が感染拡大する社会」の問題を理解するには、2009年の「新型インフルエンザ」への社会と個人の反応を想起することができます。これまでも私は、“大量で詳細な記述法”——感じ、考え、記録するという“不断・普段の営み”により日誌をつけてきましたが、2009年4月25日以降の日誌は、とりわけ強い臨場感をもつものとなりました。ひとつひとつは、きわめてつたないものですが、誤字脱字の訂正等を除けば、個々の瞬間における、理解の浅薄さや誤謬・誤認、個人的な動揺・不安感、偏見、推察、推論、直観、洞察、等々をできるかぎりそのまま遺す形で再録することを、方法論的に選択しています（その際には、社会学・文化人類学のフィールドノーツにおける「分厚い記述」を意識しています）。

2009年の日誌は、以下のような叙述の形式となっています。最初に日付、その横に、社会的な意味づけを一言にまとめた言葉、収集したデータ（インターネットから取得した新聞記事）のなかで特筆すべきもの（コーディングの対象となり得るもの）を冒頭に提示し、本文中では、起こったことについての観察、連想したこと、社会的考察などを編み合わせながら“描き遺す”ことを試みています。2009年4月21日の時点では、「勃発（アウトブレイク）」に直面していないため、“未発の事件”に対する予見として考察がなされています。

これに対して4月25日以降は、これから何が始まるのかという極度の緊張感をもって、個々の場面における動揺や逡巡も含め、出来る限りのデータ（インターネット、TV番組、新聞切り抜きなど）を収集し、身近な場所（自分）も含めて日誌（2009年4月21日から

5月8日までを掲載)をつけています**.

フィールドに出られないときの「鳥の目」のフィールドワーク——自分なりの人間と社会の現在についての全景把握を文章化する

みなさんがいま目にすることができる情報のなかには、この新たな事態（「見知らぬ明日」）に対してなんとか本気で考えようとしている言葉と、その場をしのぐため、これまでと同じ「処方箋（レシピ）」でもっともらしく話す言葉とが、入り混じっています。信頼すべき言葉、出会うべき言葉に出会うためには、他人まかせでなく、自分としても、いま起こっている社会現象をどう捉えているか、人間と社会の現在を“大きくつかむ”ことを試みると、人の言葉の内実をつかめるようになります（これは、知の消費者から創り手に変わるという意味があります）。

これまでの授業においても、私はみなさんに、〈私たちが、「景観」として見過ごしてしまっている「同時代」の“生身の現実”の“構造”と“汗や想い（情動）”を掬い取る〉という課題で文章を書いてもらってきました。

そこでみなさんには、短期的課題の「日誌の作成」を何回かに分けて行っていただき、授業の最後には、各自が、自分の言葉・自分の考えで、人間と社会の全景把握をする文章を作成してもらえればと思います。自分の全景把握の文章は、みなさんが執筆する卒業論文の序論となり得るものでもあります。私の4月12日付の文章は、つたないものではありませんが、全景把握の一例となっています²⁸⁾。

おわりに

当面お伝えしたかったことは以上です。今年度中、場合によっては来年度も、海外渡航はもちろん国内調査も実施困難である状況が続くことを想定して考え行動する必要があると思います。「景観」のようなものだと思っていた「現実」が、急にリアリティを持つ状況に対して、眼をこらし、耳をすまし、自らの日常性の構造に気付き、日常を“組み直す (ricomporre, recompose)”ことが、これからもっとも大切な課題となります。どうぞよろしくお願い致します。

2020年4月17日 新原道信拝

* 2020年のフィールドノーツ（日誌）から具体例を学生に開示している。

2020年5月1日（金）の新聞記事：

9月入学制、論点整理着手 来年導入、6月上旬にも方向性（5月1日 22：36）写真付き記事

28) 本稿では2章に収録した文章である。

東京で新たに165人感染 再び3桁へ悪化, 3日ぶり (5月1日 20:04) 写真付き記事
 首相, 4日に延期決定 緊急事態, さらに1カ月程度 (5月1日 19:10) 写真付き記事
 新型コロナ, 死者23万人超す 欧米中心に被害拡大続く (5月1日 06:12) 写真付き記事

<https://www.tokyo-np.co.jp/s/article/main.html>

〈日本の状況を確認する〉朝日新聞デジタル

国内で確認された感染者: (+266) 14,572人 死者: (+29) 486人 <https://www.asahi.com/>

東京/神奈川/秦野の感染者 (死者): (+165) 4,317人 (126) / (+15) 1,038人 (34) / 12人 (0人)

<https://news-swallow.com/new-coronavirus-map/>

<https://news-swallow.com/new-coronavirus-kanagawa-yokohama-map/>

過去のデータを確認 <https://www.asahi.com/special/corona/>

〈世界の状況を確認する〉Le statistiche del coronavirus Covid-19 per stato

世界で確認された感染者: 3,391,250人 死者: 239,108人 <https://statistichecoronavirus.it/>

国別の感染者・死者・致死率 <https://news.google.com/covid19/map?hl=ja&gl=JP&ceid=JP:ja>

イタリアで確認された感染者: 207,428人 死者: 27,428人

<https://statistichecoronavirus.it/coronavirus-italia/>

サルデーニャ州で確認された感染者: 1,313人 死者: 117人 / 1,653,135人

<https://statistichecoronavirus.it/regioni-coronavirus-italia/>

サッサリ県 848人 / 491,571人 <https://statistichecoronavirus.it/province-coronavirus-italia/sassari/>

日本 感染者: 14,325人 死者: 394人

<https://statistichecoronavirus.it/statistiche-coronavirus-giappone/>

2020年5月1日（金）の日誌:

学生に伝えたいことは、「平常にもどれない」ことを嘆くだけでなく、いま現に起こっていることに応答しようと“かたちを変えつつうごいていく (changing form)”こと。統治不可能な現実に対面したとき，“見知らぬ明日 (unfathomed future)”を生きていくことになったとき、社会学に出来ることは何だろうか？オロオロとしている自分や周囲も含めて，“ぐいっと呑み込む、書き／描き遺す、刻み込む (keeping perception/keeping memories)”という“大量で詳細な記述法 (methods of acumen, keeping perception/keeping memories)”。つまりは、全数調査、悉皆調査を行うことで、未来の洞察力をつくっていく。社会にただ「同調」することではなく、厳密な意味で“生存 (Sustainable Ways of Being)”を確保するためにやるべきことをやる。

それほど努力しなくても入ってくる情報を組み立て、過去の歴史や事例から学べば、感染拡大への対応は少なくとも3年くらいは続くこと、安全なワクチンは簡単には出来ないこと、経済活動は「もとにもどる」ことはないであろうことがわかる。しかし、為政者も市民も、「いつまでつづくのか」「早くもとにもどってほしい」という反応をしてしまうのはなぜか。そして、とりわけ為政者が、「これを機会に今まで出来なかった改革をする (ことでリーダーシップを発揮したい)」となり、9月入学の議論が唐突に浮上してくる。わずかに数ヶ月で腰砕けとなる「グローバル社会」の脆弱さの最中で、「グローバル・スタンダードだから」という理由で「9月入学」の話が出てくる。

「未決」の問題である「コロナ」への様々な反応の子細を辿ることに膨大な時間とエネルギーを必要とする。うんざりとしつつも、すでにそこに／ここに在り続けている“愚考／愚行 (follia, folly)”を無視することは出来ない。なかなか“Sinking with Style (優雅に品よく没落する／「いき」に衰えていく)”へとは向かわない、個々人の思考態度 (mind-set) とシテスムの「慣性」を理解しようとすることは放棄できない。

「先進国」が「都市封鎖」の成果によって経済活動を再開させるというニュースの影で、失業が生存の危機に直結する国・地域で、略奪・暴動が頻発しており、学校は格好の標的となっている (南アフリカなど)。別の「意匠」ではあるが、政治家の「パフォーマンス」の題材として学校の9月入学が「これを機会に」となって浮上している。脆弱な社会は、すでに痛めつけていた人々へのさらなるいじめ・攻撃・中傷・虐待・差別を増産させている。

コロナ現象は、「国民」「市民」ではない「外・国人」の問題を顕在化させる。たとえば、実数・実態を把握しないかたちで存在させてきた移民・難民、外国人労働者。たとえばマレーシアには、フィリピン、インドネシア、バングラディシュ、インドなど、様々な地域からやって来たひとたちがいて、「透明人間」が労働市場を支えている。日本においてもまた同じことが起こっている。憲法の前文には、「われらは全世界の国民がひとしく恐怖と欠乏から免れ平和のうちに生存する権利を有することを確認する」という言葉がある。足元、身近な場所のみならず、惑星地球規模となった社会のどこにいるひととも「恐怖と欠乏から免れ平和のうちに生存する権利」を確保する努力を続けねばならない。

** 2009年4月21日から5月8日までの日誌：

2009年4月21日(火)「見知らぬ明日」の予感

わたしたちは、「見知らぬ明日」を忌み嫌い、“瓦礫や廃墟の切れっ端”や“崩壊、破滅へと至る瓦礫”の「徴候(segni)」（メルッチ）が眼前に現れても、「まさか」「たまたまだ」「たぶん大丈夫」だと、「いつもと同じ」「日常の行為」、たとえばテレビのお笑い番組や友人とのメールで自分を「安心」させる。そして、どうにも、目に映ってしまう事態となったとしても、「これはあくまで一時的なものだ」と自分に言い聞かせる。マスメディアも、政治家も、市民も、誰もが、息をひそめて、必死に、身体の奥底で絶叫しながら、力をあわせて、「日常」の「楼閣」を修復し続ける。たとえそれが、泥舟であると感じたとしても。

2009年4月25日(土)「アウトブレイク(勃発)」

「豚インフル：メキシコで60人死亡 800人に感染の疑い」(4月24日23時52分 毎日新聞)

夕刊を見て、ついに、「アウトブレイク(勃発)」が始まったことを知る。「アジアの片隅の小さな事件」である「ノモンハン事件」が「世界大戦」の「アウトブレイク(勃発)」の「徴候」であったように、緊張感からのまったくの解放はないことを意識して、身体は身構え興奮する。

2009年4月28日(火) 固守の精神

「豚インフル、警戒レベル「フェーズ4」に引き上げ…WHO」(4月28日5時23分 読売新聞)

大学へとむかう電車のなか、マスクを付けた若者が一人いる。WHOの緊急委員会が予定より一日早く開かれ、フェーズ3から4へと引き上げられた朝、駅構内と電車のなかはいつもと同じように見える風景がひろがっている。カミュの『ペスト』に登場するアルジェリアの港町オランでは、ペストの蔓延が明らかに焦眉の問題となり、次は自分か(!)という状況になっても、「平静」を装う生活が続けられていった。関東大震災直後に「予定通り」に軍事行進を挙行した日本軍も、第二次大戦末期、瓦礫に囲まれながらも日常を維持しようとしたベルリン市民も、そしてあの、1945年3月10日の「東京大空襲」で、いままでみたこともないほどの数のB29による爆撃が始まって、非常事態であるとの認識を出来る限り避けようとした軍務官もまた、「日常」と「平静」を固守した。このような形の固守が、パニックの対極ではなくその一形態であることに、うっすらと気付いていたとしても、あらたな事態に対処するための方法を根本から考え直すところから始めることは、(まさにそうすべき局面であったのにもかかわらず)忌避された。

「経済危機であるからなおさら、経済活動は固守されねばならない」と考え、(現在の枠組の延長線上の)「活動」の連続のみが至上の命題となる。「フェーズ4」というあらたな事態、さらに、毒性が強まる突然変異や耐性の獲得、地震の発生、コンピューターシステムの故障など、予期しなかったリスクの「勃発」によって、対処不能に陥っている「処方箋」にしがみついたまま、肅々と、あるいは「果敢」に、「固守」が続けられる。他方で、システムによる保全をはぎ取られ、生身の現実の前に投げ出されたとき、わたしたちの手元にかろうじて残るものは、これまで蓄積された危機の瞬間の記憶を想起する智慧と、その智慧を他者との間でわかちあい行為をともにする絆だけだ。

授業では、以下の文章を学生のみなさんに送った：「私たちにとって、“端/果て”で起こったはずの『事件』が、実はわたしたちの生そのものの深部にいかなる意味と影響を持っているか、場合によっては、これからしばらくは、直接お会いする機会がなくなる可能性も含めて、考え、話さね

ばなりません。

少なくとも2009年の夏学期は、学生のみなさんとともに、①国家や社会というマクロシステムはいかなる反応を示しているのか、②自分の身近な場所で何が起きているのか、自分はどう感じ、考えているのか、という二つの点に気を配りながら、“社会学的探求”，すなわち“生身の現実を観察する”という、絶え間なく日常的になされる“不断・普段の営み”をすすめていくしかなくなった。

過去を歴史的に関連づけることは、それを「もともとあったとおりに」認識することではない。危機の瞬間にひらめくような回想を捉えることである。（W・ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」より）。

2009年5月8日（金）「既知」への「迅速」な転換／皮膚感覚の沈殿

「WHO『軽度』判断→水際作戦見直しへ…厚労省」（5月8日21時59分 読売新聞）

「カナダ短期留学の3人、A型陽性＝大阪府立高の生徒と教師－厚労省」（5月9日1時23分 時事通信）

「連休明け」には、「予想」通り、「感染患者」が「発見」されたが、すでに、この「事件」の「観客」である「わたしたち」には、「メキシコ（は「遅れている」から死者は出たけれど日本は「進んでいる」ので大丈夫）だから」「弱毒性（って言われてもそれが何かはよく分からないけれど、「弱い」というんだからきっと大丈夫）だから」「（死んだのは）慢性病患者（でもともと「弱い」ひと）だから」「（病気とか確かに心配だけど、「過剰な対応」で）いまやるべきことが邪魔されるのは困る」等々の、「既知」感が刷り込まれている。報道のトーンは、最初の「ショック」からいくつつかある「お決まり」のニュースへと変化し、「水際対策による対処済の事件」として片付けられつつある。

少数の「弱毒」患者に「対処可能」なシステムが、同時多発的な「弱毒」患者の発生には対処しきれないことが明らかとなっている。さらに、この「弱毒」が“変異”した場合には、どうなるのか。漠然たる不安は「犯人捜し」への暴力性を内包し、その不安は、「まあ、大丈夫」という「憶測」によって構築された「推論」によって覆い隠される。

「他人事」なら、「弱毒性」で「対策済み」「まあ、いいか」となる。しかしこの「弱毒」が、生身の身体の内側で生きられた状態とはどのようなものか。昨年のこの時期、重度の気管支炎（「ほぼ肺炎」となり、39度5分から40度の熱が一週間ほど続いた。そのとき、生身の“個・体（individuo corporale）”としてのわたしが体感したのは、自分の吐息が腐敗し、その腐臭が死臭へと変成していくような感覚だった。他方で、わたしの「病状」は、病院で見せてもらった「ほぼ真っ白となった」わたしの「肺のレントゲン写真」と「血液検査の数値データ」についての医師の説明によって「確認」された。わたしたちの知覚（perception）と記憶（memories）のなかに「データ」は進入し、計測され数値化され映像化された可視的「データ」によって、自らの皮膚感覚に「形」が与えられているということだ。たしかに、「形」を与えられることで「安心」をする。しかしそれでもなお、脱水し、消耗し、腐臭が自分の身体の内側から湧き出てくるという皮膚感覚は、一見「明晰・判明」な「形」とは別に身体にのこり、沈殿していく。遠くで眺める「弱毒」報道と、自らの身体から出て来る吐息との間にわたしたちの日常生活は存在している。

4 “フィールドに出られないフィールドワーク”による視野の深化と展開—— 「微生物の目／生物の目／生態系の目」

2章と3章では、“フィールドに出られない”という条件下で、いま現在進行形で生起しつつある“生身の現実”に直面し、ともに在り、クリティカルな出来事が生起する瞬間に居合わせるための条件として、同時代認識を「つまびらか」にし、乱反射するようなりフレクション

(riflessione disfonica, Dissonant reflection)²⁹⁾ を集会的に行い、そのなかで、枠組みそのものを“組み直す”ことを試みた。では、この“フィールドに出られないフィールドワーク”という経験によって、人間と社会の“うごき”を捉える試みは、どのような点で深化・展開し、いかなる意味を産出したのか？

2020年4月から2021年1月にかけて、フィールドワークを教える講義やゼミで、“フィールドに出られないフィールドワーク”という体験をともにすることとなった361名の学生・院生は、下記のデイリーワークを、例年以上に真摯に行った：

- ① “生身の現実”を観察し、絞り込まずにあらゆるものを集め、記憶していく（すべてについてなにごとかを識る）。⇒“不断・普段の営み”としての観察・記録・情報収集 keeping perception/keeping memories
- ② 集めた情報を他の事実と対比・対話・対位し、意味づけと再解釈により自前の理論を練り上げる。⇒“不断・普段の営み”としてのリフレクション（意味づけと再解釈）
- ③ 複数の目で見て複数の声を聴き、複数のやり方で、分厚い記述と再解釈をもとに分厚い叙述を練り上げていくことで、協業によって枠組みそのものを考え、新たな枠組みを練り上げる。⇒“不断／普段の営み”としての、“対話的なエラボレイション（co-elaboration, coelaborazione, elaborazione dialogante）”と“乱反射するリフレクション”

少なくない学生が、自宅や近隣に留まるという「既存の手法や知識が通用しない新しい状況の中で、それでもなんとか眼前でいままさに起こっている出来事を捉えようとする」³⁰⁾ ことの意味を実感し、前期の授業が終了した後も、個人的に取り組みを継続してくれていた。メルッチは、「諸関係の微細な網の目」を通じて「私たちがしていることの意味が創り出され、またこの網の目のなかにこそ、センセーショナルな出来事を解き放つエネルギーが眠っている」³¹⁾ と言った。この言葉は、2020年の惑星社会の状況・条件にとって、きわめて時宜を得たものであり、「コロナ禍」という社会現象の観察・リフレクションは、「観察者」あるいは、知識や情報の「消

29) 他者との間で度重なる“組み直し（ricomposizione, recomposition）”と配置変え（reconstellation/ricostellazione）をしながら行う多方向へのリフレクションについては、新原道信「乱反射するリフレクション—実はそこに生まれつつあった創造力」新原道信編『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部、2016年、417-456頁にて考察している。

30) 学生のリフレクションから見て取ることのできる“うごき”については、別の論稿を準備する必要がある。「コロナウイルス日誌」とそのふりかえりのなかでの考察により、「書き手である自分自身の真意を言葉にして、書きながら再度理解していく」こと、「日誌をつけ、後からふりかえる」ことの重要性、「こまかに身近を観察・考察する／大きくつかむことを同時にすることの重要性」への気付きなどがあげられていた。そしてまた、日誌を書き、ふりかえることで、「自分の世界」と「あとの世界」というかたちで切り離して「現実を傍観していた」ことへの気付きなどにも言及がなされていた。

31) Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996（＝新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社、2008年、1頁）。

「費者」である自分もまた、生身であり、ふだん意識しない、ちょっとした行動の違いが、身心の状態を簡単に左右してしまう脆弱な存在だということを、痛切なかたちで気付く機会をもたらしした。

どこか遠くの世界で起こった無関係な出来事として、無関心さから来る「冷静さ」で「果敢」に切り刻むのではなく、“異物”への恐れと、自身への固執から来る空疎な興奮によって、“自失”してしまうのでもない。それは、相手も自分も、切れば血が出る存在であることを忘れずに、現にそこにある“生身の現実”から血の通った理論（ものの見方）を見出していく可能性への道であった。

M. モリスの「特定の地域の文化の現場について、経験的な問いを發」し、「背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析し、自分が行ったケース・スタディに意味づけをする」という営みを学生にも紹介した（3章を参照）。では、まだこれからも続いていく不可逆な社会現象である「コロナウイルス」感染拡大、とりわけ2020年という特定の“うごきの場”で、人間と社会の“うごき”を捉える試みは、どのような点で深化・展開し、いかなる「意味づけ」を産出したのか？

学生には、「虫の目」で「経験的な問いを發」し、「鳥の目」で「大きなプロセスや縦横のネットワークを分析し」「意味づけをする」ことを推奨した。2020年の経験は、この「虫の目／鳥の目」の“対位法（counterpoint, Kontrapunkt, contrapunctus）”に、さらなる深化と展開を求めた。

以前に、「グローバリゼーションは、地球規模で『国民』『市民』といった枠からはみ出す人々の存在が可視化するプロセスでもある」³²⁾と書いた。現在では、他の生き物、ウイルスも含めて、「（人間社会、文明社会の）枠からはみ出す生物」や「廃棄物」³³⁾は、ますます無視することはできない存在になっている。抗生物質による「撲滅」「根絶」という戦略では対応できない耐性菌や変異株は、近代社会の終わりを生きる私たちの時代に必然的な「生産物」であり「収支決算」である。

実は、すでに「3.11」以降、以下のような問いを發していた：

いままなお、これからもずっと、放射能を含んだ水が流され続けているこの時代に、なぜ私たちは、自分の身体の問題でもある“惑星社会の諸問題”を感知・感応できないのか？

32) 新原道信「いくつものもうひとつの地域社会へ」新原道信他編『地域社会学講座2 グローバリゼーション／ポスト・モダンと地域社会』東信堂、2006年、227頁。

33) “廃棄（dump [ing]）”“廃棄物の発明（invention of refuse）”“造り出された廃棄物（invented refuse）”“廃棄物の反逆（rivolta dei rifiuti, revolt of refuse）”という観点については、新原道信「A. メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに—3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求（1）」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学24号（通巻253号）、2014年、41-66頁を参照されたい。

受難，死，喪失，社会的痛苦を「おわったこと，なかったこと」にする力に取り囲まれ，一般市民同士の，風水土や他の生物との，未来とのはてしなき相克，闘争が予感されるなかで，“見知らぬ明日”に対して，学問／社会学／社会学的探求には，いかなる使命があるのか？³⁴⁾

遠き“端／果て”の過去の“ひとごと (not my cause, misfortune of someone else)”であった1986年4月26日の「チェルノブイリ」は，「3.11」以降の日本社会にとって，突然，“わがごと”となってしまった．たまたまその日に吹いた風の向きで致命的な汚染に晒されるという不条理により，ウクライナやベラルーシの村と飯館村が突然つながった．一度造り出された放射能もプラスチックもPCBなどの化学物質も，地球を循環し，なかなか分解してはいかない．

私たちの生身の身体 (corporeality) は，プラスチックもPCBなどの化学物質，放射能，そして感染症の実験場に暮らす生き物と化している³⁵⁾．私たちの身体は，すでに造り出された物質，過去の「豊かさ」を支えた物質がもたらす「収支決算」としての債務相続者となっており，この「債務相続」は，何世代にもわたって，他の生物も含めて続いていく．私たちは，いわば，“惑星社会の劇的収支決算による債務相続者 (eredi del debito a causa di bilancio drammatico della società planetaria, heirs to debt due to the planetary society's dramatic balance)”である．「人間圏の肥大化」が，生物圏，大気圏，水圏，地圏に与える影響について，なぜ私たちは深慮しないのか？惑星地球の病と私たちの身体の病はどうやって治すのか？私たちは，惑星社会の一個人として，何ができるのだろうか？

食肉生産の効率化のための森林伐採と遺伝子工学，その産物として生み出された家畜の病と感染症．遺伝子操作は出来ても遺伝子をゼロから創り出すことは出来ず，「野生」の遺伝子は，貴重な資源として「狩猟」の対象となる．ここでは，人間による「自然の改造」の限界が示されている．惑星地球システムから見た場合の人間とは何か？人間は，多様な生物の“共存・共在の智 (saggezza di convivenza, wisdom of coexistence)” ，部分と全体の調和，相補性を切り裂くだけの存在なのか？微生物の秩序とダイナミズムのなかに埋め込まれた宇宙からどう学ぶのか？

34) 新原道信「“境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”を考える」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部，2014年，3頁．

35) “生物 (なまもの, cose crudi, causa cruda, corpi crudi)” “生身 (corporalità cruda, raw corporeality)” の人間が直面した限界状況，とりわけ，“私たちは，実験場に暮らす実験動物だ”と自らを理解し語るチェルノブイリの人々については，Petryna, Adriana, 2013, *Life exposed: biological citizens after Chernobyl*, Princeton: Princeton University Press (= 森本麻衣子・若松文貴訳『曝された生—チェルノブイリ後の生物学的市民』人文書院，2016年，および，Svetlana Alexievich, 1997, *Chernobyl prayer: a chronicle of the future*, London: Penguin (= 松本妙子訳『チェルノブイリの祈り—未来の物語』岩波書店，2011 [1998]年) などから示唆を受けている．

いま私たちは「新型コロナウイルス」との“出会い (incontrare l'altro, encountering the other)”に直面している。しかしこれは人間の目線である。人間よりはるかに長い時間、多細胞生物の誕生とともに、この地球上で「生きて」きたウイルスは、どのように人間を「発見」したのだろうか？あるいは人里に降りてきたイノシシやクマやシカは、どのように人間を「発見」したのだろうか？

ここにおいて、「虫の目／鳥の目」の“対位法”は、まず、人類史以前のウイルスや菌類も含めた「微生物の目」へと深化せざるを得ない。免疫の意味を問い直すことも含めて、より微細な相互作用の“うごき (nascent processes, processi nascenti)”への着目が必要となってくる。「鳥の目」もまた、“生身 (corporalità cruda, raw corporeality)” “生物 (なまもの, cose crudi, causa cruda, corpi crudi)”の観点から捉え直される。たとえば、海深くもぐるクジラや南の島のアホウドリの身体の問題と、自分たちのもとに生まれ来る子どもたちの脳や生殖器官、精子などへの影響は、ひとつの問題となっている。子どもたちのために命をかけて必死にエサを集めてきた結果が子どもの命を奪うことになる。これは、私たちがいま直面している“生体的関係的カタストロフ”を象徴する出来事である。

さらに、イノシシやシカ、ウシの身体が放射能に汚染されてしまっていることは、山野河海の視点とかかわる。「國破レテ山河アリ」はもはや自明のものではなくなってしまった。私たちは、「3.11」「新型コロナウイルス」と、膨大な時間と無数のひとの努力の集積である「山河」が、きわめて短期間に根こそぎにされていくという“底知れぬ喪失／痛みの深淵 (perdita abissale/abisso di dolore)”に直面している。この剥奪は偏差をともなって現象し、それは“社会的痛苦 (patientiae, sufferentiae, doloris ex societas)”であるのにもかかわらず、特定の人間のみならず動植物個々の生体的関係的な“痛み／傷み／悼み”として深く沈殿していく。ここで取り上げた生物の“生身”をメタファーとして、“生身”の人間の間身体性 (intercorporité, intercorporeality)の母体である「生態系 (ecosystem)」を考えることが必要となる（南方熊楠が熊野の森の粘菌の世界を視野に組み込んだように）。

ここまで見てくると、「虫の目／鳥の目」は、「(ウイルスを含めた)微生物の目／(野生・家畜・栽培を問わず動植物すなわち)生物の目／生態系の目」といった深化と展開を必要としていることとなる。では惑星地球は、どのように人間を「発見」し、理解しているのだろうか？——つまり、ここでの“問いかけ (interrogazione, ask questions)”は、“惑星社会論的な転回 (Revolution from a vision of planetary society)”を求めている。

〈個人と社会〉〈国家と市場〉〈人間と自然〉といったパラダイムを超える現実には、いま私たちは直面している。〈内なる惑星 (身体) - 個人 - 社会 - 惑星地球〉という循環をどう捉えるのか。「自分」の「外部」と「内部」という主観的な世界認識、〈個人と社会〉という科学の認識の双方のパラダイムの革新——地球の限界 (planetary boundaries)、「成長神話」の限界を見据

えた「惑星の目」による“組み直し (ricomposizione/rimontaggio, recombination/reassembling)”が求められている。

こうしたパラダイム革新を考えると、先達の予見的認識が想起される。ひとつは、小松左京の「地球論的還元」、いまひとつは、メルッチの「地球に住む」である。

5 「地球論的還元」と「地球に住む」——〈微生物の目 (microbiological/clinical) / 生物の目 (biological/global) / 生態系の目 (ecological/visionary) / 惑星の目 (planetary)〉という〈エピステモロジー〉

SF 作家の小松左京は、東京オリンピック開催年の 1964 年 8 月に、ウイルスによって現代社会が崩壊する小説『復活の日』を刊行し、その「あとがき」で下記のように語っている：

人類全体が世界の「惑星的な運命」を掌中ににぎった時、われわれもまた、「惑星的な規模」で、人類とその歴史を考察することを余儀なくされた。……人間の有限性の認識の一般化が、理想社会の実現をうながす有効な圧力となるような可能性はないだろうか？……さまざまな幻想がはぎとられ、断崖の端に立つ自分の真の姿を発見することができた時、人間は結局「理知的に」ふるまうことをおぼえるだろう³⁶⁾。

4 章の「3.11」以降の問いかけである「自分の身体の問題でもある“惑星社会の諸問題”を感知・感応」することは、小松の言うところの「断崖の端に立つ自分の真の姿を発見する」とことと重なる。小松は、1979 年に「地球論的還元」に基づく「地球社会学」の構想を提示している：

私たちの時代は……はじめてこの星に生れた生物が、母なる惑星を自分の眼で見る事のできた時代である。……「宇宙空間を背景に、自分たちの世界＝天体を見る」事が可能になった時点から、私たちの「世界」に対する認識の基底に、一つの変容が起り出したとっていいであろう。将来へかけて、すべては、この「原イメージ」を出発点として検討しなおされ、再構成されて行かねばならなくなったのだ。……すでに私たちは、進化に「干渉」するほどの力をもっている。それを駆使して、地球上の生命圏を完全に「人間本位」に変えてしまい、人間という単一種にとって「有用」な生物はさかえさせ、「無用」「有害」な生物はほろぼすか、片すみにおしやるかしてしまっているのだろうか……「地球的課題」から、次代の教育の方向や、これまでの教育そのものが、あるいは人間の社会生活上のさ

36) 小松左京『復活の日』角川春樹事務所、1998 年、437-438 頁。

まざまな願望や「価値観」までが、問いなおされねばならない時代に、私たちは直面しつつあると思う³⁷⁾。

「地球 (Earth, globe)」は、この宇宙のなかにあまた存在する「惑星 (planet)」のひとつでしかない「惑星地球 (the planet Earth)」であり、人間の社会は、その内部の複数性・多様性のみならず、他の生物やネアンデルタール人など他の人類の社会との間でも相対化されるべきものである。大量の物質を蕩尽し、外部の環境を改変してしまう文明が終焉を迎えつつあるとき、遅ればせながら、その自画像の捉え直しの必要性に直面している。ここから、小松は、人間と社会を徹底して相対化するエピステモロジーを提示する：

「母恒星及び宇宙空間、気象、海洋、地殻、土壌」などの「基礎的環境」、 「気候史や地殻変動史」、 「環境の巨視的かつ通時的な「変化」の歴史」の上に、「生物の社会」が展開する。「植物生態学や動物生態学」「動物行動科学」や「動物社会学」、そして「人類社会」、「社会人類学」や「文化人類学」による「社会」のイメージの空間的・地域的、通時的・共時的な相対化、「それぞれの社会や文化に固有の「考え方のパターン」や「情緒反応の型」も相対化するし、また宗教、道徳、美意識、芸術、社会規範といった、歴史的に形成・固定された「文化」も相対化する³⁸⁾。

すなわち、宇宙の中の一惑星、その環境の変化のなかで生まれた生命、他の生物がつくる社会、人類の社会、それぞれの社会や文化の空間的・地域的、通時的・共時的な相対化である。そのうえで小松は、以下のように述べる：

「地球科学」「地球史」「生物社会史」「人類社会史」「文明以後の人類社会」との通時的・共時的につながりをもちつつ、「現代の人類社会の状況と、その生物社会史的な背景、さらに「惑星的環境」との関係を統合した視野の中に成立させる「地球社会」を研究する「地球社会学」を構想する³⁹⁾。

この“惑星社会論的な転回 (Revolution from a vision of planetary society)”によって、“宇宙のなかの惑星地球という視点 (perspective of a planet Earth in the universe, prospettiva di

37) 小松左京『地球社会学の構想—文明の明日を考える』PHP 研究所、1979年、213-215頁。

38) 同書、203-204頁。

39) 同書、209-211頁。

un pianeta Terra nell'universo)⁴⁰⁾ から、特定の現場を“うごきの場 (field of nascent moments, campo di momenti nascenti)”として捉える可能性が開ける。

メルッチもまた、“惑星社会論 (vision of planetary society)”による“生存の場としての惑星社会の探求 (Exploring planetary society for sustainable ways of being)”を構想した。そして、“新たな社会への見通しをつくる (creating a perspective on alternative society)”ことを試み、“惑星社会のフィールドワーク (Exploring Fieldwork in the Planetary Society)”への道を開いた。メルッチは、主著『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』の第9章を「地球に住む」としている：

こんにち私たちは、解決不能な問題に直面し、それらが複雑性の文化的・社会的境界を定めている。いずれの問題も、両極に対立するものからどちらか一方を選択せよというありえない要求を私たちに突きつけてくる。というのは、まさしくこれらの問題の二極間の緊張こそが、惑星システムの不安定な均衡それ自体を支えつつ、新たにつくり変える糸を紡ぎあげているのである。にもかかわらず、それらは、見かけ上の解決策が不確実性をただ別のところに移すだけだとしても、必ずや解決せねばならぬ問題であり続ける。それゆえ、これらの問題に対して私たちが講じる対処法は、絶えざる意思決定しかない。しかし決定はまた、日増しに耐え難くなる緊張を回避しようとする方途にもなり、私たちに課されているジレンマを虚構で固め、それらを名付けようとする努力を妨げるものともなるのだ。……人間の時間と空間は、私たちが、地球という惑星とそれをこえて広がる宇宙の一部を形づくっているのだという自覚において、分かち難く緊密に絡み合ってくる。人類は、地球に住むことの責任／応答力、そして種を破滅に導くような生産物に対して、絶対に侵犯してはならぬ境界を定めるという責任／応答力を引き受けねばならない。人間の文化は、存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリーを、今一度確保すべきである。どのような人間社会も、そのような領域をそれぞれ独自の仕方でも認めてきた。今や、自らを創造する力と破壊する力をも獲得した社会は、そのようなテリトリーを自ら定義し直さなければならない。惑星地球における生は、もはや神の秩序によって保証されてはいない。今やそれは、私たちすべての脆く心許ない手に委ねられているのだ⁴¹⁾。

40) 科学と哲学をクロスさせた試みとして、青木滋之「宇宙における我々の位置—科学と哲学の協奏」春日直樹編『科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考形式』東京大学出版会、2016年、216-235頁、あるいは、田口卓臣「形而上学的時空差と見えないものの認識」『モルフォロギア：ゲートと自然科学』42号、2020年、84-107頁を参照されたい。

41) Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996 (= 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑

これは、人間中心主義、地球中心主義から離れて、惑星社会と人間、その意味を探究する現象学だ。「惑星地球における生」を捉え直し、「ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」は、惑星地球の大気圏、水圏、地圏を母体として存立する生物圏、そのなかの人間圏のすべての「網の目」のなかにしか存在し得ない。加えて、あくまで人間による“思考／試行／志向”であるが、clinical, global, visionary, planetary という分類を仮置きしておく⁴²⁾。

以上を、“織り合わせる (intrecciare insieme, weave together)” と、「虫の目／鳥の目」は、より“対位的な (contrappuntistica/polifonico/disfonico, contrapuntal/polifonico/dysphonic)”な構成、すなわち、〈微生物の目 (microbiological/clinical) / 生物の目 (biological/global) / 生態系の目 (ecological/visionary) / 惑星の目 (planetary)〉として“組み直す (ricomporre/rimontare, recompose/reassemble)”こととなる。すなわち、「微生物／生物／生態系／惑星」の間身体性のなかで意識的／非意識的に他者の身体との相互作用のみならず自らの身体（内なる惑星）の声を聴くという惑星社会の学である。

こうして、新たに深化・展開した“問いかけ (interrogazione, ask questions)”は、以下のものとなる：

“宇宙という大海のなかに浮かぶ塵の一つのような惑星地球、その惑星地球をひとつの地中海として、社会をそのなかに浮かぶ島々として体感するような“智”——地球規模の複合的諸問題に応答する“臨場・臨床の智”を、いかにして紡ぎ出すのか。地球の、他の生き物の、他の人間の悲鳴を、感知し、感応する“共存・共在の智”をいかにして可能とするのか？

6 おわりに——「新型コロナウイルス感染症」のもとでの“フィールドに出られない惑星社会のフィールドワーク”の経験から組み直された“うごきの比較学”の〈メソドロジー〉

本稿では、“惑星社会論的な転回”，あるいは「地球論的還元」によって地球に住む (Inhabiting the earth) ——社会の現在、人間と社会の“宿命／命運／運命 ([one's] fate/destiny, destino)”を考えようとしてきた。惑星社会と内なる惑星としての身体という二つのコルプスの間の“対位法 (counterpoint, Kontrapunkt, contrapunctus)”“対話的／対位的なフィールドワーク

星社会における人間と意味」ハーベスト社、2008年、174-177頁)。

42) ここでの clinical は、まさに klinikós (微細な生命の床に臨む microbiological) となる。global は、地球 (globe) そのものの生命系 (biological), visionary は、地殻や気象、海洋の変動も含めた生態系 (ecological), planetary は、宇宙の中の惑星地球の視点となる。

(dialogic and poly/dis-phonical Fieldwork)”である。

ここで問題になっているのは、都市封鎖やワクチンの供給や財政悪化の問題ではない。大気圏、水圏、地圏を母体として存立する生物圏、そのなかの人間圏——人間／動物／植物／ウイルスの関係性から見る〈微生物の目／生物の目／生態系の目／惑星の目〉による惑星社会の学の〈エピステモロジー〉である。

「虫の目」「鳥の目」よりさらに、時間・空間、森羅万象の“深層／深淵 (obscurity, oscurità /abyss, abisso)”への拡がり・深まりとともに世界を見てきた古代の智者のように、“宇宙のなかの惑星地球という視点 (perspective of a planet Earth in the universe)”から、「新型コロナウイルス感染症」というフィールドを捉え直してみる。

細胞も細胞膜も持たないウイルス／細胞壁を持つ植物／複雑化と組織の分化をおしすすめた動物という物質と生命の相互連関の位相について、より複雑化した人間の身体が進化の頂点に立つと考えられてきた。しかしながら、細胞壁によって内と外を峻別した植物からさらに、免疫機構を発達させた動物のひとつである人間とは別に、“かたちを変えつつうごいていく (changing form)”ことを極限までおしすすめたウイルスもまた、ひとつの進化の到達点ではないかとも考えられる。つまり、ウイルスを“かたちを変えつつうごいていく (changing form)”, 「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由 (a freedom that urges everyone to take responsibility for change)」を持った存在だと考えてみる⁴³⁾。

あるいはまた、病原体の攻撃に対して病原体に感染した自らの細胞を犠牲にして病原体もろとも死滅させ、全体を守る植物と、人間社会における「トカゲのしっぽ切り」「抑圧移譲」を、生存戦略という同一の基準で考えてみる。

さらには、人間の免疫細胞、免疫系が、「非自己」と「自己」を区別して個体のアイデンティティを確保し、異物を死滅させるという構造(「超システム」)をどう考えるのか? 免疫学者の多田富雄は、「非自己」から「自己」が「互いに曖昧につながる」「生命のもつあいまいさや多重性」に着目し、「寛容」という言葉で、“共存・共在の智 (saggezza di convivenza, wisdom of coexistence)”を表し出した⁴⁴⁾。

“生身の現実 (realtà cruda, raw reality)”を大きくつかむときには、免疫学、生物学、社会学、どこからでも入ることが出来る。唯一条件となるのは、自分中心主義 (centrism) を相対化し、“端／果て (punta estrema/finis mundi)”からの視点をもつこと、科学の「枠」など軽々

43) 「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由 (a freedom that urges everyone to take responsibility for change)」については、新原道信「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由をめぐる一古城利明と A. メルッチの問題提起に即して」『法学新報』115 巻, 9・10 号, 2009 年 3 月, 697-722 頁を参照されたい。

44) 多田富雄『免疫の意味論』青土社, 1993 年と『生命の意味論』新潮社, 1997 年, さらに山内一也『ウイルスの意味論—生命の定義を超えた存在』みすず書房, 2018 年などを参照されたい。

と踏み越え、打ち砕く、現実そのもののうごきに対して、何ができるのか／何をするのかを考えることである。以下、暫定的なまとめを行なう。

1. ここまでの“思考／試行／志向”の冒険をふまえた，“うごきの比較学（“Comparatology” of nascent processes/moments）”の現段階は、以下の通りである：

【“惑星社会の劇的収支決算による債務相続者”による“惑星社会のフィールドワーク”と“うごきの比較学”の構想】

- ① うごき：nascent moments of relationship, nascent processes, processi nascenti, “毛細管現象／胎動／交感／未発の社会運動（movimenti nascenti, nascent movements）” “未発の状態（stato nascente, nascent state）” “道行き・道程（passaggio：移行・移動・横断・航海・推移・変転・変化・移ろい）” “身構え・心構え／身心の組成・構成（composizione di mentecorpo/corpomente, composition of mindbody/ bodymind）” という理解。
- ② 場：place, space, place, site, case, circumstance, moment, condition, situation, “地域社会／地域／地（regions and communities/ territory/ earth, regioni e comunità/territorio/ terra）” “宇宙のなかの惑星地球という視点（perspective of a planet Earth in the universe）” という理解。
- ③ 比較：人間中心主義／地球中心主義から我が身を引きはがし，“ひとごと（not my cause, misfortune of someone else）” から“わがこと，わたしのことがら（cause, causa, meine Sache）” への転換を図るという“思行（思い，志し，想いを馳せ，言葉にして，考えると同時に身体がうごいてしまっているという投企）”。

2. また、構築の途上にある“惑星社会のフィールドワーク”は、以下の特徴を持っている：

- ① “惑星社会のフィールドワーク”は，“惑星社会と内なる惑星へのフィールドワーク（Exploring the Planetary Society and Inner Planet）”という特徴を持つ。〈個人と社会〉〈国家と市場〉といった従来の社会認識のパラダイムを，〈内なる惑星（身体）－個人－社会－惑星地球〉という拡がりや深まりによって把握する試みである。すべてがローカルな運命共同体，逃げていく場所のない領域（テリトリー）となった惑星地球，「グローバルなフィールドとその物理的な限界（the global field and its physical boundary）」を持つ“惑星社会（planetary society）”を生きる人間であることを身体感覚も含めて理解する，なかなか実感のわかない惑星社会の全景を“感知し（perceiving/ sensing/ becoming aware）”，“大きくつかむ（begreifen, comprendere）”ためのフィールドワークである。
- ② “生体的関係的カストロフ”が多発する惑星社会においては，危機の瞬間，予想外の出来事がすぐに常態化していき，その“うごき（nascent processes, processi nascenti）”は，

少し後になるだけで“感知する (percieving/ sensing/ becoming aware, percependo/intuendo/diventando consapevole)”ことが困難となる。この“特定の場と時間に生起したことがらを忘却する性向 (amnesia)”を抑止するため、日常生活のあらゆる様々な場面で、臨機応変に、感じ、考え、“大量で詳細な記述法 (methods of acumen, keeping perception/keeping memories)”によって、すべてを“描き遺す”。たいへんな時期、ゆっくりものを考え書くことなど出来ない状況で、たとえそれがつたないものでも、その日の社会と自分を観察し、その日に“描き遺す”という“不断／普段の営み (デイリーワーク)”を基本とする。

- ③ とりわけ、身体感覚，“内なる惑星のフィールドワーク (Exploring the Inner Planet)”を重視し、生身の身体で、現実のうごきのなか、余裕のないなかで、自らふりかえり続ける、その営みを他者との間で“交感／交換／交歓”し続け、なけなしの経験と智恵を“組み直し (recompose/reassemble)”，“織り合わせる (weave together)”。調査者側の当初の作業仮説とは異なる理解の在り方、現象の現れ方、相関関係などに出会い、予想通りにいかない場合が、もっとも貴重なリフレクションの場を提供する〈エピステモロジー／メソドロジー／メソツズ／データ〉である。

“惑星社会のフィールドワーク”において、“うごきの比較学”はメソドロジー (modus operandi)として作用する。〈微生物の目 (microbiological/clinical)／生物の目 (biological/global)／生態系の目 (ecological/visionary)／惑星の目 (planetary)〉で、“グローバル社会で生起する地球規模の諸問題 (global issues)”の背後に在る“根本問題 (fundamental problem)”を切り出す。“問いかける (interrogando, asking questions to)”ことをあきらめずに、想定内の「問題解決」ではない“新たな問いを立てる (formulating new questions)”ことを続けていく。

こうして、私たちは、すでに「未発」ではなく、起こってしまった「3.11」そして「新型コロナウイルス感染症」を、〈人間 (動物)／植物／ウイルス／物質の生物地球化学的な循環のなかでの社会〉, Biogeochemical cycle, Material/Substance Circulation, Ecosystem のなかの *communitas/society* という観点から捉えていくこととなる。